

・5分前着席を心がけましょう

司式 熊田雄二牧師
奏楽 浅池慶子姉妹

前 奏

開 会 招 詞

* 賛 美 歌 4 : 1 あめつちにまさる神の御名

あめつちにまさる神の御名を

ほむるにたるべき心もがな アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈 禱 書 2 (詩編51編)

かみ 神よ、わたしを^{あわ}憐れんでください。おんいつく 御慈しみをもって。ふか おんあわ 深い御憐れみをもって、そむ つみ 背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの^{とが}咎をことごとく洗い、^{あら}罪から清めてください。わたしは^{とが}咎のうちに^う産み落とされ、^{はは}母がわたしを^み身ごもったときも、わたしは^{つみ}罪のうちにあったのです。

わたしを^{あら}洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの^{うち}内に^{しろ}清い心を^{うた}創造し、^{あた}新しく^{たし}確かな^{れい}霊をさずけてください。救いの^{すく}喜びを再びわたしに^{あじ}味わわせ、^{じゆう}自由の^{れい}霊によって^{ささ}支えてください。主よ、わたしの^{くち}唇を開いてください。この^{くち}口は、あなたの^{さんび}賛美を^{うた}歌います。主イエス・^{しゆ}キリストの^み御名によって。アーメン。

罪の赦しの宣言

十 戒 祈 禱 書 4

1. あなたは、わたしのほかに、^{なにもの}何者をも^{かみ}神としてはならない。
2. あなたは自分のために^{ぞう}刻んだ^{つく}像を造ってはならない。それに^ふひれ伏してはならない。それに^{つか}仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの^{かみ}神、^{しゆ}主の名を、^なみだりに^{とな}唱えてはならない。主は、^なみ名をみだりに^{とな}唱える者を、^{ばつ}罰しないではおかない。
4. ^{あんそくにち}安息日をおぼえて、これを^{しゆ}聖とせよ。
5. あなたの^{ちち}父と^{はは}母を^{うやま}敬え。
6. あなたは^{ころ}殺してはならない。
7. あなたは^{かんいん}姦淫してはならない。
8. あなたは^{ぬす}盗んではならない。
9. あなたは^{りんじん}隣人について^{ぎしやう}偽証してはならない。
10. あなたは^{りんじん}隣人の^{いえ}家を^{つま}むさぼってはならない。隣人の^{つま}妻、またすべて^{りんじん}隣人の^{もの}ものを^{むさぼ}むさぼってはならない。 (出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 74 : 1 主の道歩まん

わが主に赦され心安らぎ 新しき力心に満ちて

主の道歩まん 主の道 アーメン

公 同 の 祈 禱 祈 禱 書 37 宗 教 改 革 記 念 日 (10 月 最 終 主 日)

歴 史 を 支 配 し て お ら れ る 神 さ ま 、 あ な た の 御 前 に 、 次 々 と 信 仰 の 世 代 が 起 こ さ れ て い き ま す 。 あ
な た は 、 過 ち の 多 い 神 の 民 を 、 忍 耐 と 励 ま し を も っ て 導 い て く だ さ い ま し た 。 そ れ ゆ え わ た し た
ち は 、 聖 書 か ら 忍 耐 と 慰 め を 学 ん で 希 望 を 持 ち 続 け る こ と が で き 、 深 く 感 謝 し ま す 。

宗 教 改 革 の 指 導 者 た ち は 、 「 聖 書 の み 」 の 精 神 に 立 ち 、 あ な た の 御 言 葉 の 全 体 が 真 理 で あ る と
告 白 し ま し た 。 ま こ と に 、 「 あ な た の 御 言 葉 は わ が 足 の と も し 火 、 わ が 道 の 光 」 で す 。 そ れ ゆ
え 、 わ た し た ち は 、 絶 え ず 御 言 葉 に た ち か え り 、 信 仰 と 教 会 を 改 革 し 続 け る こ と が で き ま す よ う
に 。

(ローマ15、詩編119)

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 大会憲法委員会 70

今 さ さ ぐ る そ な え も の を 主 よ き よ め て う け た ま え アーメン

聖 書 朗 読 ルカによる福音書1章57-80節 (新約聖書101頁)

説 教・ 祈 禱 「あけぼのの光」 熊田雄二牧師

* 賛 美 歌 103 : 1 日 々 主 は そ ば に い ま し

日 々 主 は そ ば に い ま し 悩 み に 勝 つ 力 全 て の 重 荷 を 負 い 慰 め 助 け た も う

愛 に 満 て る 御 神 は 恵 み を 日 々 与 え 悩 み 苦 し む 時 も 憩 い と 安 き た も う アーメン

* 主 の 祈 り 祈 禱 書 1

天 に ま し ま す 我 ら の 父 よ

願 わ く は 御 名 を あ が め さ せ た ま え

御 国 を 来 た ら せ た ま え 御 心 の 天 に な る ご と く 地 に も な さ せ た ま え

我 ら の 日 用 の 糧 を 今 日 も 与 え た ま え

我 ら に 罪 を 犯 す 者 を 我 ら が 許 す ご と く 我 ら の 罪 を も 許 し た ま え

我 ら を 試 み に 会 わ せ ず 悪 より 救 い 出 し た ま え

国 と 力 と 栄 え と は 限 り な く 汝 の も の な れ ば な り アーメン。

* 頌 栄 69 父 の 御 神 に ・ 御 子 に ・ 聖 き 御 霊 に

父 の 御 神 に ・ 御 子 に ・ 聖 き 御 霊 に

昔 な が ら の 御 栄 え あ れ や と き わ に アーメン アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙 禱)

報 告

雨宮信 長老

I 洗礼者ヨハネの誕生

イエス・キリスト誕生の半年前、洗礼者ヨハネが誕生しました。聖書は預言の成就で構成されているので、旧約は預言、新約は成就と言えます。特に預言者はキリストの出現を準備するのが使命でしたから、洗礼者ヨハネは最後の預言者でした。

天使が乙女マリアの所に来て受胎告知した時、「あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六ヶ月になっている」と言いました。そこでマリアは、エリサベトの所に行って三ヶ月ほど滞在しました。六ヶ月プラス三ヶ月で九か月。そろそろ生まれる頃、マリアはおいとまして家に帰りました。

さて、神の約束どおり、エリサベトは男の子を産みました。洗礼者ヨハネの誕生です。家族親族友人知人は、みな喜び合いました。不妊の女と言われていたので、家族親族は肩身の狭い思いをしていましたし、近所の人々もその話題は避けて、気を使っていたことでしょう。しかし、不可能が可能になったので、「主がエリサベトを大いに慈しまれた」と喜び合いました。

そして、名前を付ける段になって、人々は、祭司ザカリアの子だから、当然ザカリアと付けようとなりました。勝手に人の子の名前を付けるなんて強引だなあとと思いますが、祭司の家系だったので、それが常識だったのでしょう。ところが、母エリサベトが反対しました。「いいえ、名はヨハネとしなければなりません。」

そこで人々は、口が利けなくなっていたザカリアに聞きましたら、ザカリアは板を持って来させて「この子の名はヨハネ」と書きました。するとその時、ザカリアの口が解けました。ザカリアは、年寄りに子供が産めるわけではないと、神の奇跡を信じなかった不信仰の呪いが解けたのです。そして、解けるや否や、神を賛美し始めました。

II ザカリアの讚美 ①この子はどんな人になるのか

ザカリアの讚美のところは「ザカリアの預言」という小見出しになっています。67節で「父ザカリアは聖霊に満たされ、こう預言した」とあるので、預言ではありませんが、むしろ預言の成就を讚美しているのが内容です。この讚美の預言には未来予言はないのかと言うと、なくはないです。「いったい、この子はどんな人になるのだろう」と言った人々に、「こんな人になるのだ」と言った預言でもあります。だから預言は未来予言を含みますが、この程度は予告です。

洗礼者ヨハネが誕生してどんな人になるのかは、ザカリアの讚美後半の76～79節です。「幼子よ、お前はいと高き方の預言者と呼ばれる。主に先立って行き、その道を整え、主の民に罪の赦しによる救いを知らせるからである。これは我らの神の憐れみの心による。この憐れみによって、高い所からのあげぼの光が我らを訪れ、暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和の道に導く。」

幼子は「預言者」になりますが、「いと高き方の預言者と呼ばれる」とわざわざ言っているのは、なぜでしょう。もちろん、預言者ヨハネがいと高いわけではありません。預言者はいと高き神の言葉を告げるに決まっています。洗礼者ヨハネは最後の預言者なので、直接「いと高き方」＝キリストの「預言者と呼ばれる」わけです。

のちにユダヤ教の指導者たちがイエス様に「あなたは何の権威を持って神殿で教えたりするのか」、つまり「あなたは天からの権威を持っているのか」と議論を吹っかけてきたことがあります。そこでイエス様は、逆にユダヤ教指導者たちに問いかけました。「洗礼者ヨハネは天からか、それとも地からか」と。ユダヤ教指導者たちは、ヨハネを天からの預言者と認めていませんでした。そういう議論に備えているかのように、「ヨハネは天からの預言者であって、地上的な偽預言者ではない」とザカリアは歌っています。

幼子の仕事は、「主に先立って行き、その道を整え、主の民に罪の赦しによる救いを知らせる」ことです。主イエス・キリストに半年先だって生まれるのは、主の道を整えるためですが、これはもう、天使からザカリアに告げられていました。ザカリアが特に讃美しているのは「これは我らの神の憐れみの心による」という、「神の憐れみ」です。

ザカリアは不信仰で口が利けなくなりましたが、口が解けて讃美の声にあふれました。自分も不信仰だったけれども、イスラエルは不信仰によって国が滅ぼされた。今や呪いが解けて神の憐れみを受ける時が来た、と讃美しています。78-79節「この憐れみによって、高い所からのあけぼのの光が我らを訪れ、暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和の道に導く。」

これはイザヤ書のメシア預言9章の引用です。「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。・・・ひとりのみどりごが私たちのために生まれた。・・・その名は『驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君』と唱えられる。」そこで、この幼子が仕えるお方＝イエス・キリストがどれほど大きいスケールか讃美しているのです。そのスケールの大きさは、私たち異邦人にも及ぶほどのものです。

Ⅲ ザカリアの讃美 ②この子はどんな人の備えをするのか

そこで、ザカリアの讃美の前半は、そのスケールの大きい方への讃美です。これが先でした。68-75節。

「ほめたたえよ、イスラエルの神である主を。主はその民を訪れて解放し、我らのために救いの角を、僕ダビデの家から起こされた。昔から聖なる預言者たちの口を通して語られたとおりに。それは我らの敵、すべて我らを憎む者の手からの救い。主は我らの先祖を憐れみ、その聖なる契約を覚えていてくださる。これは我らの父アブラハムに立てられた誓い。こうして我らは、敵の手から救われ、恐れなく主に仕える、生涯、主の御前に清く正しく。」

さすが祭司には教えられます。アブラハム契約とダビデ契約を、ちゃんと踏まえています。マタイ福音書の始まりが「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図」

と言っていることに通じるものがあります。

特にアブラハム契約に関しては、「我らの父アブラハムに立てられた誓い」と言っていることに特徴があります。契約というのは、通常、条件付きです。労働の契約は、1時間働いたら時間給1000円を支払うというように、「～したら」という条件付きです。聖書の契約で条件付きと思われるのは、モーセ律法です。律法を守れば祝福、破れば呪いです。それでも、エジプトの奴隷状態から救い出すという恵みが先にありました。なぜ救い出されたのかというと、アブラハム契約があったからです。

アブラハム契約は、神様が約束の地を与える、約束の子孫を与えると、神様からの一方的な恵みが約束されていました。そこで、約束の子孫を約束の地に連れて行くことが出エジプトの根拠でした。400年の奴隷状態で、イスラエルの民が忘れてしまっても、神はアブラハムとその子孫に対して約束されたことをお忘れになりません（創世記15：13.14）。そこで、ザカリアは、それを神の「誓い」と言っています。神が御自身にかけて誓いをなされたので、人間がどうであろうと必ず果たしてくださる恵みの契約なのだと讃美しています。

「主は我らの先祖を憐れみ、その聖なる契約を覚えていてくださる」という感謝が、その讃美に表れています。「我らの先祖」イスラエルは、神との契約を忘れて、遂に国は滅びるに至った。しかし、主なる神はその聖なる契約を覚えていてくださった。今こそ、その誓いが果たされる時が来たと、讃美しているのです。

IV その誓いは、「我らの先祖」というイスラエルだけに関係することか

いいえ、私たち全ての者に関わるのです。アブラハム契約の約束の地は、東西南北見渡す限りの全世界を意味していました。約束の子孫は、全ての民を含んでいました。そうであるなら、「我らの先祖」の罪も、我らに関わることとなります。

「それは我らの敵、すべて我らを憎む者の手からの救い」と言っていますが、同時に洗礼者ヨハネの役目を「主の民に罪の赦しによる救いを知らせる」とも言っています。ですから、敵とは突き詰めると自分の罪なのです。本当の敵は、北イスラエル王国を滅ぼしたアッシリアや、南ユダ王国を滅ぼしたバビロンではありませんでした。いやむしろ、主はバビロンを使ってユダを滅ぼすと言えど、預言者たちに命令されました。だから、主に従わない王たちに狙われる、命がけの仕事になりました。

「我らの先祖」は神との契約を忘れて罪に陥り、遂に滅びるに至ったということは、新約時代の私たちにも当てはまります。私たちは洗礼を受けて主の民とされました。しかし、神との契約をおろそかにして罪に陥り、自ら滅びを招いているということはないでしょうか。それでも神は聖なる契約を覚えていてくださいますから、罪の赦しによる救いへと、いつでも招かれています。

私たちは毎週、礼拝で罪の告白をしています。それも、ダビデ王が犯した罪を自分の罪と、告白しているのです。だからイスラエルという「我らの先祖」は、今現在の私たちと

大いに関わるのです。毎週主の日に教会に向かって行くことができるのは、神が両手を広げて罪を赦そうと招いておられるからです。だから私たちは、キリストにおいて罪を告白し、赦しの宣言をいただき、十戒を唱えます。

「こうして我らは、敵の手から救われ、恐れなく主に仕える、生涯、主の御前に清く正しく。」 このような讃美と善き業を献げるために、私たちは礼拝に向かうことができます。主の憐れみは大きいのです。